

第3節

地域活性化のための 組織づくりと地域ビジョン



【概要】

自然環境保全活動や交流活動・産直活動を集落で取り組むには、幾つかの大切なポイントがある。

第一には、集落の活動をリードする中心的役割を果たす組織が必要である。久知河内集落では「ホタルの会」が母体となって集落の様々な活動を組織すると共に、外部の団体や市民・行政との連携窓口となっている。第二には、個人の役割分担である。「ホタルの会」ではメンバーの役割分担により、会が持続的に運営されている。第三には、自然環境保全活動のための資金確保である。自然環境保全活動には活動資金が必要である。例えば、棚田ビオトープをつくるにも道具が必要となる。広報担当の役割に注目したい。第四には、地域興し・活性化のためのビジョンづくりである。それには、集落の住民と外部の市民・行政・団体等との連携や外部からのアドバイスが役立つ。久知河内では、それまで培ってきた外部の人や団体との交流・連携を基盤にして、「久知河内地域ビジョン」を作成した。これらの様々な団体・市民・行政との連携の上にこれらの活動が支えられていることを概観する。その上で、集落人口の減少と高齢化が、今後の活動維持にどのような課題を投げかけているかについて触れる。

【ねらい】

本節では、久知河内集落の持続可能な地域づくりのための活動が、集落内の組織やコーディネーターの役割、そして外部の市民・組織や行政とのネットワーク、また活動資源の獲得や情報発信の取り組みによって支えられていることを紹介し、そのような人材・組織作りが鍵になるということに気付いて貰うことがねらいである。

久知川という自然環境資源を大切にして、その自然環境保全活動に取り組み、またそれを利用した地域活性化活動への取り組みを支えているものは何だろうか。ここでは、「ホタルの会」の組織のコーディネーターの存在と外部の団体等との連携に注目したい。その成果が、「久知河内地域ビジョン」の作成であり、その作成の様子を理解してもらうことがねらいである。そして、人材養成・後継者作りや自然・文化資源の開発・掘り起こしが、持続可能な地域作りにとって課題であることの理解を深めたい。

1. 「ホタルの会」を核としてつながる 久知河内集落と外部団体・市民

久知河内集落の住民が、棚田ビオトープ作り等の

自然環境保全・再生活動、「ホタル祭り」などの交流活動、「ホタル米」等の産直販売活動を進めるに当たって、「ホタルの会」がその核になり、集落外の行政・市民・NPO 等との連携や交流を図ってきた。

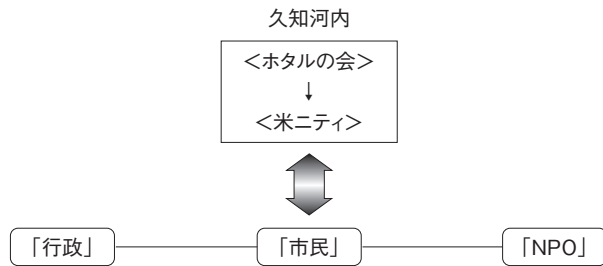


図1 久知河内集落の地域作り活動の内容

その関係図を示すと、図1のようになる。

2. 集落の組織としての「ホタルの会」

久知河内集落の自然環境保全活動や地域活性化の中心的役割を担っているのが、「ホタルの会」である。実際の活動への参加は、一部の役員に偏りがちであるという課題も抱えているが、一部有志団体の活動としてではなく、集落の活動として取り組んで来たところに、この活動の特徴がある。集落の活性化・地域興しを課題としており、その課題解決に取り組むためには、集落住民による活動として取り組むことが望ましいだろう。そのような関係を久知河内集落と「ホタルの会」にみることができる。

「ホタルの会」は図2のような組織として運営されてきた。

「ホタルの会」は集落内の他の団体との協力関係にあるとともに、外部の団体との連携関係も持っている。久知河内集落の地域づくりが、「ホタルの会」単独のものではなく、集落の複数の団体との協力関係を持ち、またトキの野生復帰連絡協議会や里地ネットワークなどを通して、島外の団体や市民との連携の上に設置されたものであった。

1 「ホタルの会」運営の分担

「ホタルの会」を運営するに当たっては、その役割分担があげられる。普段の活動においては役員がその中心であるが、役割を分担して個人の持ち味を生かしつつ、また負担を分散させている。

会では、「会報 ほたるの里」を発行している。それを通して、棚田ビオトープづくりの活動報告やホタル祭り、「ホタル米」の販売等についての情報を会員に提供している。会報は、庶務幹事が担当している。

「ホタルの会」の運営に当たっての特徴は、外部の協力団体との担当窓口が設けられていることである。「トキの野生復帰連絡協議会」には会から代表を送っている。その代表が、会の広報担当的役割を担い、外部団体や行政との情報交換の窓口となり、あるいは会の活動を支える補助金を行政や民間から得るための申請書作成等にも取り組んでいる。いわば、会の運営のための指針となる情報を得たり、活動資金を得る役割を担うかなめとなる担当が置かれていることに特徴がある。

2 会員の参加・協力による「ホタル祭り」

ホタル祭りは10日間から2週間にわたって開催される。その期間には、地元で採れるウドの販売などの活動もある。また、ホタル鑑賞の訪問者の案内や来訪者数の確認等の作業がある。このために、一部の人による運営では実行不可能であり、会員のボランティアによる協力・参加体制の上に成り立っている。

ホタル祭りの期間中(現在では10日間程度)には、毎晩6～7人の会員が祭り運営にボランティアとし

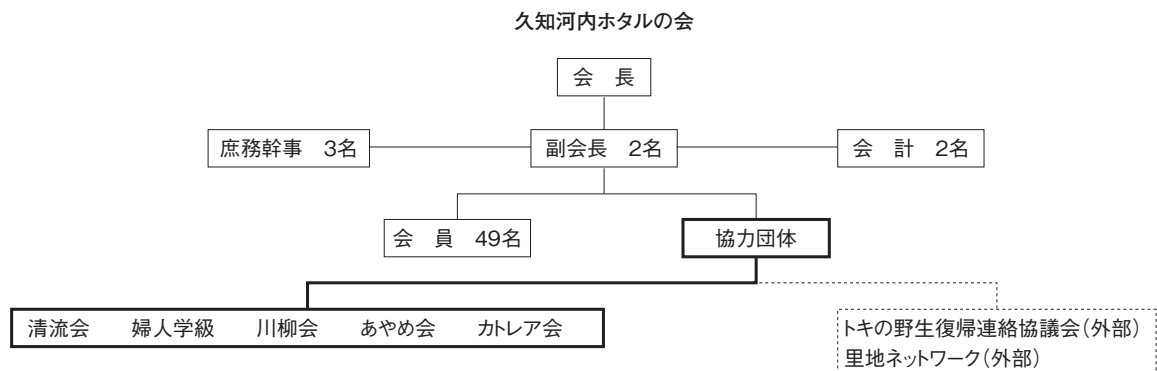


図2 「ホタルの会」組織図（平成18年度現在 ※現在、一部組織に変更がある）

て参加する。各会員は、祭りの期間中（現在10日間程度）、平均して2～3回の担当日があるという。担当日は、庶務幹事が事前に担当者を決め、その予定表を会員にあらかじめ配布しておくのである。

ホタル祭りでの役割分担としては、訪問者の交通整理、ホタル鑑賞の案内、特産品の販売、来訪者数の確認などである。先に、ここ数年の来訪者数を紹介したが、これは専任のカウンター・ボランティアが数えたものである。毎年の来訪者を記録に残すことで、活動反省材料に生かすことも狙いとしている。

3. こまめな情報発信が効果を生む

ホタルの会を中心とする久知河内集落の環境保全活動や生産活動について、複数のメディア・団体・機関を通して、広く情報発信がなされていることに特徴がある。

ホタルの会の会報は、会員の機関誌である。しかし、ホタルの会の活動が定着するにしたがって、その成果が評価されるようになると、「県民だより」や雑誌、テレビコマーシャルでも情報が発信されるようになる。それらを以下に挙げてみる。

- ① 県民だより・佐渡地域版「はばたき」Vol.5
（2001（平成13）年7月16日発行）
「特集 久知河内ホタルの会」
- ② 県民だより・佐渡地域版「はばたき」Vol.13
（2003（平成15）年7月6日）
「特集 久知河内の地域ビジョン 昔からずっと、川とともに、久知河内」
- ③ 久知河内地域ビジョン「昔からずっと、川とともに、久知河内」冊子完成
（平成15（2003）年3月26日完成）
ウェブ上にも掲載
- ④ 『団塊シニアの「生き甲斐」発見Book I』（平成17（2005）年、技術評論社）に巻頭カラーで紹介
- ⑤ Team Eco への参加（市からの誘い）
年1回川の清掃……1か月間テレビコマーシャル
- ⑥ ほたるの会会報「ほたるの里」（代表 菊池秀夫 連絡先 石川正代）
Vol.4, No.1 2003/6/5～No.4 2003/10/25 まで入手

会の成果がマスメディア等を通して発信されることで、久知河内集落のホタル祭りの認知度が高くなってきている。近年、島内のホテルの中にはホタル祭りを企画して観光客に佐渡島をPRすることもあるも出ている。

また、久知河内集落の自然環境保全活動を核とした地域興しについての知名度がアップすることは、行政等からも注目されことになり、公的な機関誌でも紹介されるというプラスの効果を生み出すことに役立っているといえよう。

4. 活動のために補助金を活用する

地球的環境問題への関心の高まりの中で、さまざまな人が自然環境保全活動に参加する時代となった。参加の動機と参加の方法についてはさまざまであるが、久知河内集落のような高齢化・過疎化の進む地域で、住民が主体となって、継続的に自らの集落の機能を持続・継続させていくことを視野入れて活動をするとき、活動のための資金が必要である。自然環境保全活動にはさまざまな費用がかかる。棚田ビオトープをつくるに当たっても、鎌・鍬などの道具や草刈り機、耕耘機などの機械も必要になる。それらの活動のための費用を自己負担することは、高齢化・過疎化する地域の住民にとって、ときに過重な負担となり、現実的には難しい。

このために、行政の補助事業や民間の補助事業に申請して、活動資金を得ることに広報担当の会員が中心となって取り組んでいる。そのような、コーディネートや企画・運営する手段・方法をもつことも、住民が主体的になって地域作りに取り組むに当たって大切な視点であると思われる。

5. 住民と外部との連携の成果としての「久知河内地域ビジョン」づくり

「ホタルの会」を母体にして、久知河内集落の地域ビジョンづくりが行われた。そして、そのためには外部のアドバイザーや行政との連携も大切な要素である。この地域づくりにNPO里地ネットワーク事務局長の竹田純一氏（地域づくりアドバイザー）も関わっている。以下にそれらの関係について、概観してみよう。

久知河内地域ビジョン「昔からずっと、川とともに、久知河内」が完成したのは、2003年3月26日のことである。本事業は、2002年度「新潟県、緑の里山・いきいき夢プラン事業」として取り組まれた。

本ビジョンは、2002年度後期に、久知河内集落の地域ビジョンについての7回の検討会（9月～3月26日）と野歩きを踏まえて作成されたものである。その前には、プレシンポジウム（9月7日）、先に紹介した獨協大学学生との交流会（7月）等も開催し、集落としての取り組みが行われている。

地域ビジョンの夢は「ホタルが舞い、鮭の帰る久知川に」である。水環境を中心にした地域の自然環境づくりである。このビジョンづくりには、外部のアドバイザー・住民・新潟県職員・旧両津市職員が参加し、住民・外部市民、行政が一体となっている。

先に述べたように、ビジョンづくりにあたって集落の住民が共有していた問題意識とは、「自分たちの集落は、持続可能なのか」という、集落の機能や集落そのものの存続に対する危機意識であった。人口が減って集落の伝統行事も維持できなくなる。だんだん寂しくなって活気もなくなる。若い人も定着しなくなって悪循環になる。その悪循環を断ち切るためにどのような地域ビジョンを描き、どのような方策によってそれを実現するかが、課題となった。

久知河内住民が選択した手段は、地域にある身近な自然環境—久知川の水環境とその流域の自然—の中に豊かさの可能性を見だし、その自然環境の保全活動を通して、地域興しを図ろうとするものであった。

1 久知河内の地域ビジョン～地域にあるものを見直し、ビジョンを描き出す～

筆者らは、2003年に学生とともに久知河内の地域づくりの調査を行った。学生はその報告書において、久知河内の取り組みを以下のように評価している。

「地域ビジョンとは、この地域をどんなところにしたいか、この地域でどんな生き方をしたいか、そんな思いをまとめたものである。

この地域ビジョンをつくる主体となるのは、地元の住民であるが、地域アドバイザー、行政らとともに取り組むことで、そのビジョンに広がりを持たす

ことが可能となる。また、それをつくる上で大切になってくるのは、無から新しいものを取り入れ、つくるというのではなく、地域にすでにあるもの、自分たちと関わりの深いものを見直すということである。地域ビジョンを実行する上で重要なことは、地域を大切にするという心であり、そうなるためには、媒介となるものは、地域の人々にとってなくてはならないもの、とくに、生活において関わりの深いものになるのは必然である。媒介となるものは、たくさんあるに超したことはないが、それらが、単独として存在していたのではあまり意味を持たない。相互に関連性を持つことが必要である。

久知川というかつて人々の生活に密接に関わっていた「川」を中心に据え、そこから、トキの餌場となる田、川の周辺に生息するホタル、久知川の源である山などのように派生して地域ビジョンづくりを行っていた。

このように、地域のシンボルとなるもの、核になるものを設定することが、ビジョンづくりの第一歩であり、最も大切な仕事である。」

2 地域ビジョンから始まる地域づくり

久知河内集落では、久知川に生息しているホタルを地域の財産とし、ホタル祭りを毎年開催している。祭り期間中のホタル鑑賞者数は多い年には2,000名にものぼり、今では年間行事の一つとして地域に定着した。ホタル祭りを開催することは地域外の人々を呼び込むだけでなく、久知川のホタルの幼虫等の生態調査や、地域外の人と久知川の清掃という地域交流の場としても活かされている。

また、久知河内で収穫できる米を久知川のホタルにちなんで「ホタル米」としても販売している。

久知河内の山奥には、棚田が点在しているのだが、農作業をする人々の高齢化が進んでいるため、作業が困難になり、放棄田と化している。その放棄田は、獨協大学生との地元学を通して、地元住民と大学生の協力のもとトキの餌場としてビオトープ化した。

久知河内ではこれからの久知河内の地域ビジョンづくりのため、2002年度に7回にわたりワークショップを開いた。このワークショップでは、久知河内住民だけでなく、県の職員、アドバイザーの方々も招いて話し合いが行われた。そこでは、川、ホタ

ル、田圃、大学生との交流、山、地場産品、少子化等さまざまなことが話し合われた。

川についての話し合いについてあげると、住民一人一人の久知川の思い出を語ることで、川を見つめ直し、さらに川に対する願いを出しあう。住民の願いとして、「サケの遡上によるサケ祭りをやりたい」というのが上げられる。その願いを実現するために、サケの遡上実現のための方法、手段の話し合いが行われ、その話し合いをもとに次年度にできる活動を決め、実践している。

ワークショップを行うことで、住民同士が話し合い地域に対する関心を高めることができる。住民の地域ビジョンを明確にすることは、皆で久知河内を創りあげていこうという主体者・当事者意識や協働する姿勢を育むのに効果的であろう。

久知河内集落が取り組んできたこれらの活動とその成果を、次の世代にどう受け継いで発展させ行かか、地域の自然環境保全活動だけでなく集落機能の持続性・発展性を高める上での課題となっている。」（一部修正した。）

6. 久知河内の持続可能な地域作りの直面する課題—この10年近くの活動

10年近くの期間に数回、久知河内集落を訪問し、入り聞き取り調査等により地域づくり活動をウォッチしてきた。持続可能な集落機能を維持することを目的として、地域の自然環境資源を活用する地域づくりを具体的な目標とする当初の課題は、この10年間続いている。直面する課題は更に重さを増しているかもしれない。

一つは、集落人口の減少が進行していることである。久知河内集落は、現在、世帯数の急減はみられない。しかし、若年層の減少と高齢者の増加は、村落機能及び村落そのものの維持の課題に直面することになる。二つ目は、久知河内集落の地域づくりの中心的活動であった「ホタル祭り」の過去2年間の中止である。「ホタル祭り」という地域の自然環境

資源を活用して、集落外の人々との交流・農産物の販売等による地域活性化が滞ることは、それを核にした地域づくりを通して集落機能の持続性を保つという、活動の循環性が失われるかもしれない。

佐藤康行の最近の調査研究で、久知河内集落における地域づくりの課題が示されているが（佐藤康行「縮小する地方社会における地域再生」『社会学年報』No.40, 2011）、村落機能の持続性を維持するという目的のもとに、地域づくりの活動をリードする人の育成と活動組織の強化、そして地域づくりの核となる天然・文化資源・活動の掘り起こしが必要になる。そうした一つの岐路に直面しているのかもしれない。未だ問題解決の過程にあり、これからも続く営みである。それは、これから佐渡市内の集落、日本社会の多くの地域で直面している課題である。久知河内集落の取り組みに触れ、そこから持続可能な地域づくりの課題・可能性等を探る学びを深めて欲しい。

（初版の全面改訂はできなかった。初版を踏まえ、今日の久知河内集落の活動の現状と課題について若干の記述を附加した。2011年9月）

— 学習のための参考図書 —

- 1) ロジャー・ハート著/IPA日本支部訳『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実践—』（萌文社、2000）
- 2) 小澤徳太郎『スウェーデンに学ぶ「持続可能な社会」』（朝日新聞社、2006）
- 3) 植田和弘他編『持続可能な地域社会のデザイン』（有斐閣、2004）
- 4) ユネスコ/阿部・野田・鳥飼監訳『持続可能な未来のための教育』（立教大学出版会、2005）
- 5) 今村光章編『持続可能性にむけての環境教育』（昭和堂、2005）
- 6) 地元学事務局、吉本哲朗著『風に聞けも、土に着け【風と土の地元学】』（地元学協会事務局、2000）

— 謝 辞 —

この度、私たち「新潟大学佐渡市環境教育ワーキンググループ」は佐渡市からの依頼を受けて、『佐渡市環境教育副読本 指導書 佐渡島環境大全』及び小学校・中学校用副読本の改訂版を作成・発行する運びとなった。私たちが2008年春に初版を発行してから4年間が経過し、初版内容の見直しや編集のあり方を検討する必要が出てきたからである。

改訂作業は夏休みを中心とする実質数ヶ月間の短期間での取り組みであった。このため、字句修正等の部分改訂を基本としたが、以下の観点からの初版内容の見直し、改訂作業に重点的に取り組んだ。

一つには、トキの生態等に関する新たな事実・知見を記述したことである。

初版発行後の2008年秋に第1回トキ放鳥が行われ、それから2011年までに78羽のトキが自然界に放鳥されている。それによって、トキの行動範囲や食餌の生態等についての新たな事実・知見も徐々に明らかになりつつある。このため、新たなメンバーを迎えて、改訂作業に取り組み、現時点での最新の情報を提供することができた。

二つには、佐渡島を取り巻く海洋環境の記述を新たに盛り込んだことである。

佐渡島の環境特性の一つは、周囲を海洋に囲まれていることである。海洋環境は佐渡島の自然事象の形成や生活・生業に様々な影響を及ぼしている。この度は、理学部附属臨海実験所のスタッフの参加を得て、佐渡島の海洋環境についての自然科学的知見を新たに記述することができた。

三つには、指導書内容の編集方針を見直して、初版で各章末に掲載されていた「活動の事例や指導のポイント」を精選し、一つにまとめたことである。そして、「活動の事例や指導のポイント」をより活用しやすくするためにDVD-ROMに収録することにした。

佐渡島での環境教育にとって必要な新たな知見を盛り込み、また活用の利便性を図った内容構成による改訂版を、こうしてご披露できるのは、なによりの喜びである。

教育出版株式会社の皆様には、短期間での改訂編集に心を砕いて戴いた。心より御礼のことは述べたいと思う。

こうして改訂された本書が、佐渡島の環境教育に関心を持つ多くの皆さんにこれまで以上に活用されることを願うと共に、佐渡島発の環境学習・環境教育が益々発展することを願ってやまない。

2012年1月

新潟大学佐渡市環境教育ワーキンググループを代表して

宮 蘭 衛／内田 健

執筆者一覧（氏名、研究分野及び執筆稿） ※ 五十音順

池田哲夫	新潟大学・民俗学	第1部第2章第3節
石澤 進	元新潟大学・植物学	第1部第1章第3節
石間妙子	新潟大学大学院・動物生態学	序章
伊藤亮司	新潟大学・農業経済学	第1部第2章第2節
祝前博明	京都大学・集団遺伝学	第1部第2章第2節
内田 健	新潟大学・社会学	第1部第2章第1節／第2部第3章第1節
遠藤千尋	新潟大学・動物生態学	第2部第1章第6節
大石麻美	新潟大学・動物生態学	第2部第1章第6節
岡島 毅	新潟大学・草地学	第1部第2章第2節
神蔵勝明	元新潟県立佐渡高等学校・地学	第2部第2章
佐藤康行	新潟大学・社会学	第1部第2章第6節
柴田 透	新潟大学・経済学	第2部第3章第2節
下谷豊和	新潟大学・海洋動物学	第1部第1章第5節
鈴木郁夫	元新潟大学・自然地理学	第1部第1章第1節／第1部第1章第2節
関島恒夫	新潟大学・動物生態学	序章／第2部第1章第4節／ 第2部第1章第6節
関谷國男	元新潟大学・両生類学	第1部第1章第4節／第2部第1章第2節
高木幸子	新潟大学・家庭科教育学	第1部第2章第5節
永田尚志	新潟大学・動物生態学	第2部第1章第1節／第2部第1章第2節／ 第2部第1章第3節／第2部第1章第5節／ 第2部第1章第7節
西山真樹	新潟大学大学院・海洋動物学	第1部第1章第5節
野崎真澄	新潟大学・比較内分泌学	第1部第1章第5節
福原晴夫	新潟大学・生態学	第1部第1章第4節
福山利範	元新潟大学・育種学	第1部第2章第2節
本間航介	新潟大学・森林生態学	第1部第2章第4節／第2部第1章第1節／ 第2部第1章第3節／第2部第1章第7節／ 第2部第2章
三沢眞一	新潟大学・農業水利学	第1部第2章第2節
宮 蘭 衛	新潟大学・社会科教育学	第2部第4章第1節／第2部第4章第2節／ 第2部第4章第3節
山口智子	新潟大学・食物学	第1部第2章第5節

佐渡市環境教育副読本 指導書

佐渡島環境大全 改訂版

2012 年 3 月 31 日 改訂版第一刷 発行

編 集 新潟大学佐渡市環境教育ワーキンググループ

図版・イラスト かわしま はるこ

生 物 画 監 修 館野 鴻

協 力 環境省／佐渡市立両津郷土博物館／
財団法人佐渡博物館／新潟交通株式会社

編 集 協 力 教育出版株式会社

発 行 者 新潟県佐渡市

〒 952 - 1292 新潟県佐渡市千種 232 番地

印 刷 ・ 製 本 株式会社第一印刷所

※ 無断複製を禁じます。

